

特色ある大学づくりのための パートナーシップの確立を

学生部長 三好信浩



広島大学の歴史は、およそ二〇年を区切りにして、三つの時期に分けられるように思う。一九四九年の開学は、戦前から地元民の待望していた総合大学の発足であって、それ以後創業期の努力が続けられた。一九六九年に起こった大学紛争は、第二の転機であって、本学では、大学のあり方をめぐって熱心に議論を重ね、各種の改革案を作成した。その成果のひとつとして、全国に先がけて、総合科学部という新構想の学部が誕生した。

それから二〇年経った今日、大学淘汰の時代に入り、全国の大学は、生き残りをかけて、魅力ある大学づくりへの道を削っている。本学もまた、大学院の重点化を期すとともに、学部教育の専門化を進めている。各学部は、それぞれの専門教育を、教養的教育と絡み合わせたカリキュラム改革に取り組んでいる。紛争時とはちがって、目に見えぬ形で進行している大学改革であるだけに、真綿でじわじわと首を締めつけられるようなきびしさがあふ。努力した大学とそうでない大学の格差は、

やがて歴然とあらわれてくるであろう。

本学は、留学生五〇〇人を含めて一万六〇〇〇人の学生が集う、日本屈指の大学園となった。当然のことながら、学生もまた、この新しい大学づくりのパートナーとして参加して貰わねばならない。遊び心で無為に過しても、広島大学の卒業生として通用した時代は終わった。大学の評価は、その卒業生の力量に向けられる。どれだけ有為の卒業生を社会に送り

出すことができるかが、これからの評価の基準となる。

もちろん、学生が主体的に進める課外活動や大学行事も重要である。前者は、人間形成の幅を広げ、後者は、協力友愛の輪を強める。専門職業人の陥りがちな人間的偏狭さを救うためにも、これらの活動や行事にも自主的に参加して貰いたい。

ところが、本学には、他の大学には見られないもうひとつの難問がある。新キャンパスへの移転がそれであって、このために莫大な量のエネルギーが費やされている。特に、来春に迫った総合科学部の移転は、全学の半数の学生に関係する一大事業である。それだけに多くの混乱が予想されるし、何よりも心配なことは、文教予算削減のあたりを受けて、学生のサークル活動の拠点となる学生会館その他の建設が遅延することである。関係の委員会などで対応策を検討してきたが、予算を伴うことであるため、妙案は浮かばない。何とか、全学の協力を得て、この事態を乗り切りたいと考えている。

戦後、廃墟の中からよみがえった不死鳥は、いまや新天地において、おおとり(大鵬)となつて雄飛しようとしている。特色ある大学づくりを目指したパートナーシップの確立に向けて、学生諸君もまた意識革命をして欲しい、と願うこと切である。